

札幌大都市圏における都市化

—国道12号線沿線を例として—

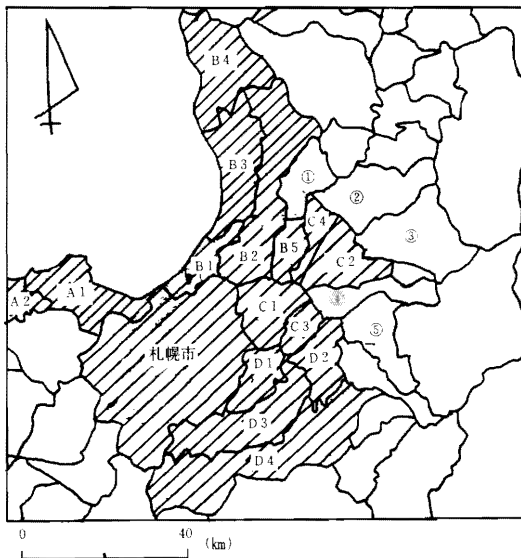
森 永 洋 行

I はじめに

1960年以降、産業構造の変化に伴い都市部への人口集積が進んだ。特に就業地としての地位を強める大都市の人口増加は著しく、その影響は周辺地域にもおよび、大都市圏の形成につながった。東京・大阪・名古屋の三大都市圏はその代表的存在であるが、地方の中心都市においても同様の現象が見られる。本論文は、このような状況の中で巨大化を続ける大都市圏の周辺市町村における都市化の過程について考察を行うことを目的とする。対象とする都市圏としては、北海道の広域中心都市である札幌市を中心とする大都市圏を選定した。

II 研究対象地域の設定

国勢調査資料「大都市圏」では、中心市への通勤・通学人口が総人口の1.5%を超える市町村を都市圏として設定している。図1ではこれを基に札幌大都市圏を示すとともに、交通網から4つのセクターに分類した。本論文ではこのうち札幌市への流出人口の最も多いセクターCの人口の大半を占める、江別・岩見沢の2市を研究対象地域とした。



A 1	小樽市	C 1	江別市	D 1	千歳市
A 2	余市町	C 2	岩見沢市	①	月形町
B 1	石狩町	C 3	南幌町	②	美瑛市
B 2	当別町	C 4	北村	③	三笠市
B 3	厚田村	D 1	広島町	④	栗沢町
B 4	浜益村	D 2	長沼町	⑤	栗山町
B 5	新篠津村	D 3	恵庭市		

図1 札幌大都市圏

(国勢調査資料より)

Ⅲ 通勤・通学における札幌市の影響

研究対象地域である江別・岩見沢両市と札幌市との相互関係を通勤・通学の点から示した（図2）。本図から、江別市では1970・1990年共に流出超過であり、通勤・通学共に札幌市の比率がかなり高いことがわかる。一方岩見沢市は距離的な要因から江別市と比べて札幌市の比率は低くなるが、他の周辺市町村と比べて高いことがわかる。ほかに岩見沢市では、この20年間で通勤・通学人口が入超から出超に転じたことが特筆されるが、これは周辺市町村の人口減と事業所数の増加に原因があると考えられる。

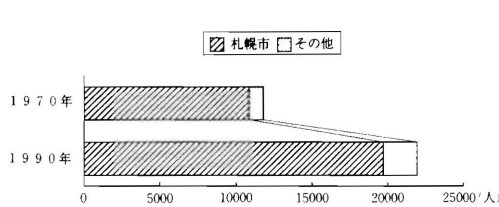


図2-1 流出(江別市)
国勢調査資料より

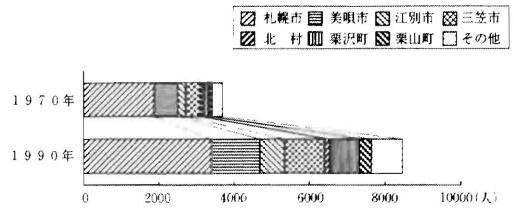


図2-3 流出(岩見沢市)
国勢調査資料より

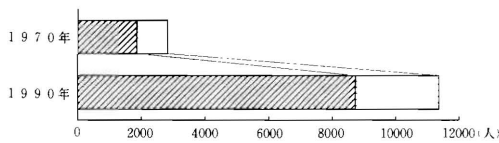


図2-2 流出(江別市)
国勢調査資料より

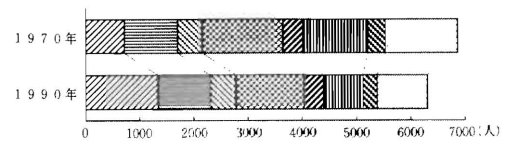


図2-4 流出(岩見沢市)
国勢調査資料より

Ⅳ 都市化の過程と都市計画

本章では、研究対象地域の都市化の過程を DID 地区の拡大と人口分布の変化から考察を行うとともに、都市計画との関連性からその特色を明らかにした。

1) DID 地区の拡大

国勢調査資料により、1960～1990年間の DID 地区の拡大状況を図3に示した。

江別市は石狩川による水上輸送の中継地として開拓された歴史を持つことから、明治時代から1960年頃までは、JR江別駅前が市街地の中心であった。1970年になると市街地は江別・野幌・大麻各駅前の3極構造となった。この要因としては、野幌地区に商業を中心とした中心地機能の集積がみられるようになったことと、1968(昭和43)年より南部のJR線沿いに札幌の人口増加に対応して大麻団地が造成された事が挙げられる。その後市街地は3極を埋める形で拡大し、現在はJR線を軸に北西および南東方向にも広がりつつある。

一方岩見沢市は岩見沢駅前を中心に市街地の拡大を見たが、南・東方面が中心である。この要因としては、函館本線・室蘭本線の2本のJR線が北・西方面への市街地拡大の物理的障壁となっている事が挙げられる。

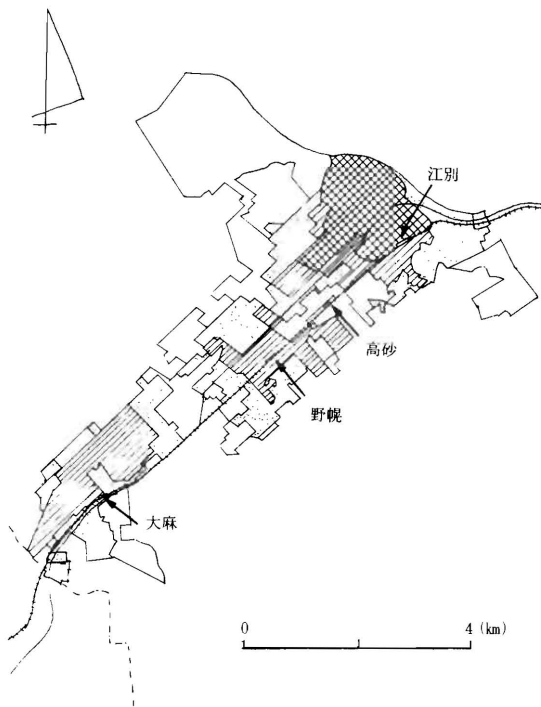


図3-1 DID地区の拡大(江別市)
国勢調査資料より

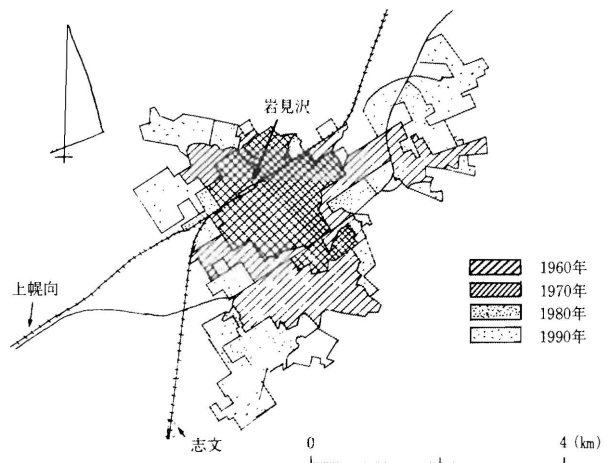


図3-2 DID地区の拡大(岩見沢市)
国勢調査資料より

2) 人口分布

両都市における地区別人口密度を図4に示した。

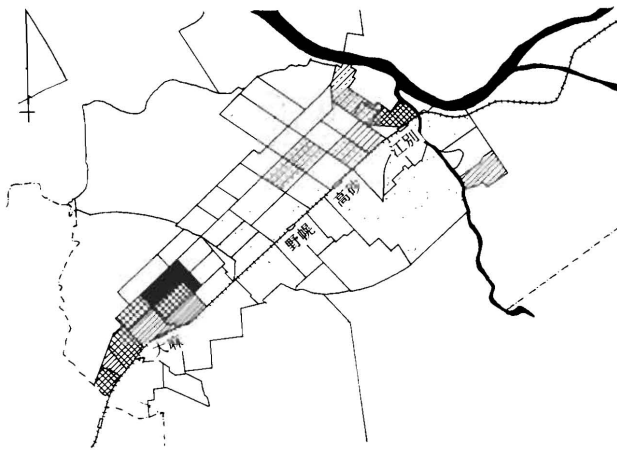
江別市では、1960年と1975年では人口高密度地区に大きな違いがみられる。古い市街地である江別駅前地区の人口密度低下は、周辺地区に人口増加が見られることから人口の空洞化現象であると言える。1975年には大麻団地への極端な人口集中がみられる。当団地は1970年の国勢調査で就業人口の約82%が札幌市へ通勤していることから考えて、この頃から札幌のベッドタウン化が始まったと言える。大麻団地の人口は1970年代後半にピークを迎え、1990年の人口密度は1975年に比べて低下している。1990年の人口密度は現市街地内においてほぼ均一であるが、江別駅前周辺の人口密度低下は著しい。

岩見沢市では、図4より、1970年には岩見沢駅前(6)に人口集中がみられることが分かるが、1990年には当地区の人口密度は低下するとともに周辺地域、特に南・東部の人口が増加しており、人口の空洞化現象がみられる。図4の(1)~(11)地区は図3のDID地区とほぼ一致するが、DID地区外の(13)地区においても人口密度が上昇している。この地区はJR幌向駅を中心とした地区で、岩見沢都心から約10km離れているが、札幌駅まで最速で約30分と近く、札幌就業者向けの住宅地と考えられるが、当地区の通勤状況に関する資料は入手できなかった。

1960年



1975年



1990年

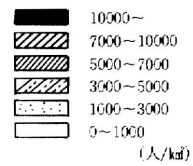


図4-1 地区別人口密度(江別市)

国勢調査資料より

1970年

1990年

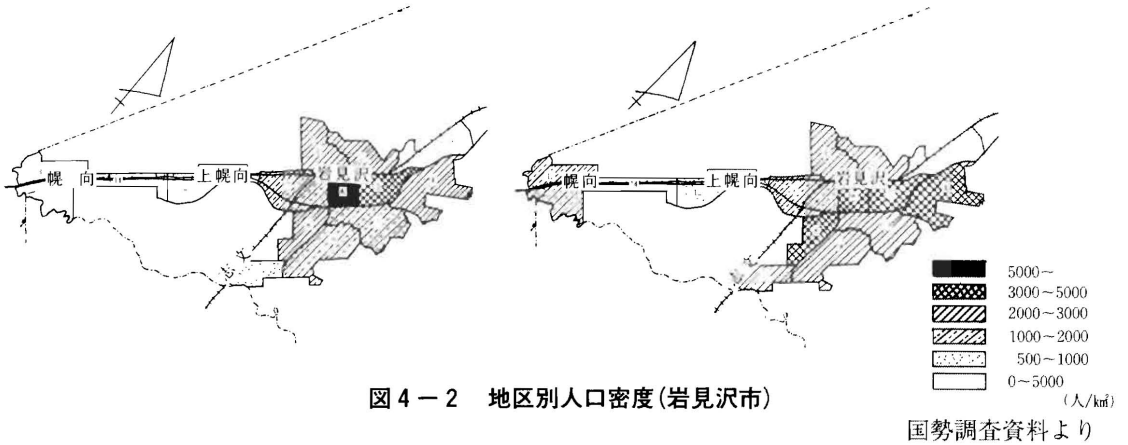


図4-2 地区別人口密度(岩見沢市)

国勢調査資料より

3) 用途地域の概況

両都市における、都市計画法に基づく用途地域の概況を図5に示した。

江別市は全体の4.7%を占める商業系地域が江別・野幌・大麻の3駅周辺に設定されている。特に市街地中央にあたる野幌地区の指定面積が大きく、市内に3店舗ある第一種大規模小売店舗のうち2店舗がこの地区に立地し、市内最大の商業地となっている。しかし江別市商工会議所が1987年に行ったアンケート調査によると、市民の札幌市への買い物依存率が32.7%と高率を示しており、江別市の商業機能が強力ではないことを示している。

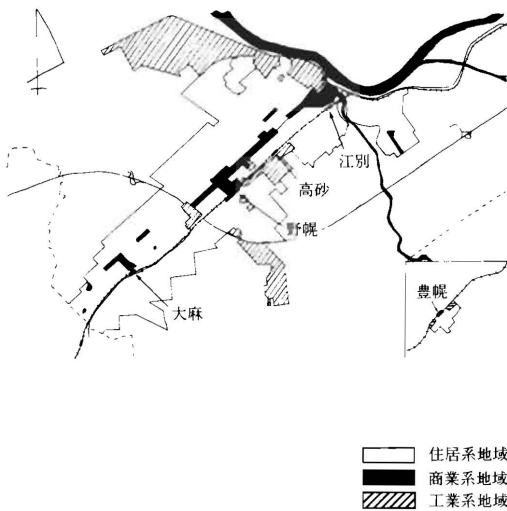


図5-1 用途地域の概要(江別市)
札幌圏都市計画図(江別市)より

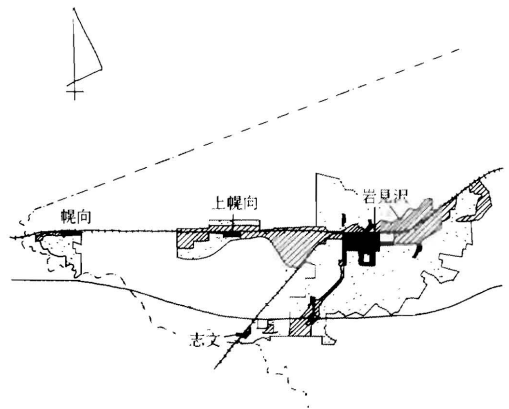


図5-2 用途地域の概要(岩見沢市)
岩見沢市都市計画図より

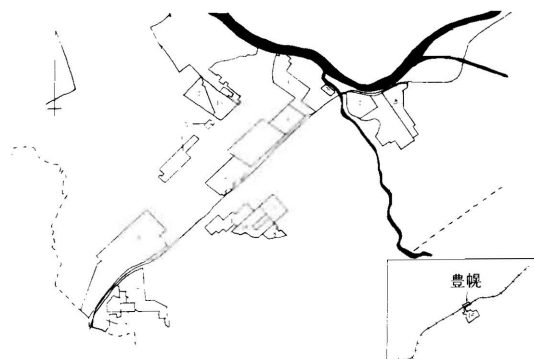
全体の20.6%を占める工業系地域は市街地の北端・南端に設定されている。北端部は1970年代に造成された工業団地である。南端部は市が先端技術研究施設の集積を目指す地区で、1985年よりバイオ研究施設や大学の立地が進んだ。

岩見沢市では全体の4.1%を占める商業地域の大半が都心である岩見沢駅前集中している。特に全体の1.6%を占める商業地域はこの地区のみに設定される。市内に5店舗ある第一種大規模小売店舗の全てが都心に立地する。

27.3%を占める工業系地域はJ R 函館本線沿いと道央自動車道岩見沢インターチェンジ周辺に設定されている。このうち北部は純粋な工業団地的色彩が強いが、南西部は準工業地域が大勢を占め、住商工の混在がみられる。岩見沢インター周辺は自動車交通の便を利用しての流通団地が1977年までに造成された。

4) 面的整備状況

区画整理事業による面的整備状況を図6に示した。



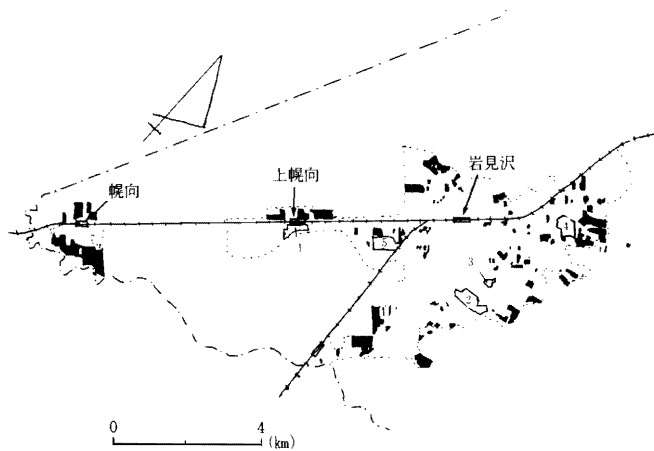
施行者	施行年次	面積(ha)	施行者	施行年次	面積(ha)
1 町	S19~S24	74.2	11 組合	S47~S58	75.5
2 町	S28~S32	55.0	12 組合	S50~S61	61.3
3 市	S29~S31	5.0	13 組合	S55~S62	56.8
4 市	S33~S36	33.9	14 組合	S57~H4	35.6
5 市	S36~S38	106.0	15 組合	S57~H3	45.8
6 道	S39~S46	215.0	16 組合	S58~S63	19.8
7 市	S40~S44	39.0	17 組合	S62~H7	29.2
8 組合	S43~S48	40.5	18 組合	H2~H10	12.8
9 市	S45~S53	260.7	19 組合	H4~H12	23.0
10 組合	S46~S55	39.3	20 組合	H4~H13	35.3

図6-1 面的整備状況(江別市)

札幌圏都市計画図(江別市)より

江別市では活発な区画整理事業が特筆される。現在遂行中のものも合わせて20か所行われており、市街化地域に占める面積比率は約46%である。これは道平均(15.6%:1987年)を大きく上回る。その中で特に重要なものは野幌駅前の商業地造成(2)、野幌地区の宅地造成(5)、大麻団地の造成(6)、工業団地の造成(9)の4か所である。このうち(2)、(9)の存在は図5と合わせて見る事で、区画整理が宅地造成だけでなく、工業地・商業地の純化に効果をあげていることが理解できる。また(6)が、江別市街地の構造を激変させる要因となったことは前述の通りである。

一方岩見沢市では区画整理はほとんど行われていない。1958~72年の間に行われた5カ所のみで、市街化区域に占める面積はわずかに約4%である。さらに(5)の区画整理は工業系地域で宅地造成目的で行われており、当地区の住商工混在の要因となっている。図には民間の開発行為も示したが、これは都心を除く市街地の各所に点在しており、スプロールの開発が容認されてきたことをうかがわせる。区画整理を除く宅地造成の中で最大のものはJ R 幌向駅南側の住宅地であるが、これは1973年より造成が始まり、当地区の人口増加の要因となっている。



	施行者	施行年次	面積 (ha)
1	組合	S 33～S 45	18.2
2	市	S 34～S 38	35.7
3	個人	S 35～S 36	5.9
4	市	S 39～S 42	23.2
5	組合	S 43～S 47	26.0

図 6-2 面的整備状況(岩見沢市)

市役所資料より

V おわりに

最後に、本論文をまとめてみると、次のようなことが挙げられる。

- 江別市では1970年以降、市街地構造が激変した。その要因としては、札幌のベッドタウンである大麻団地の造成が挙げられる。古い市街地から大きく離れた地域に造成されたことが中心地機能の移動を招き、旧市街の中心地機能および人口は低迷した。
- 岩見沢市では岩見沢駅前を中心に市街地が拡大したが、札幌への交通の便の良い地区は、都心から離れていても人口増加が見られる。江別市のような市街地構造の変化がみられないのは、札幌からの距離の違いによる影響力の差のほか、石狩川により北東方向へ市街地拡大のための後背地を持たなかった江別駅前と異なり、岩見沢では市街地拡大を阻む自然条件がなかったことが挙げられる。

最後に本論文作成にあたり、御助言、御指導をいただいた後藤先生、水野先生、ならびに資料作成に御協力いただいた関係市役所、商工会議所の方々に、深く感謝いたします。

[参考文献]

- 土居晴洋(1984)：市街地周辺における土地利用変化の分析 人文地理36—1, 40～63
- 土居晴洋(1989)：広島県黒瀬町における集団住宅地の立地と土地利用規制
地理科学44—4, 223～240
- 伊藤久雄(1971)：野幌屯田兵村の変容 北海道地理46, 8～13
- 森川 洋(1991)：わが国における都市化の現状と都市システムの構造変容
地理学評論64—8, 525～548
- 富田和暁(1988)：わが国大都市圏の構造変容研究の現段階と諸問題 人文地理40—1, 40～63